

健康人間学初めての夏合宿

—あらたな出会いとつながり—

腰 原 菊 恵

The First Summer Lodging Together of Health Anthropology

Kikue KOSHIHARA

ことのおこり

京都大学医療技術短期大学部の研究プロジェクトとして始まった健康人間学は、2カ月に1度の定例研究会を中心に活動がされてきた。開始してから75回の定例会を迎える頃、今まで何度か話が出ていた泊まりがけの研究会の話が再び持ち上がった。在任中、健康人間学のコーディネーターをされ、現在では飯田女子短期大学に行かれた小西昭先生のお誘いもあり、初めての合宿を長野県飯田市で行うことが決まった。

飯田で行われると決まったときから、小西先生ご夫妻から2日間では見て回れないような多くの飯田の（研究資料ではない）観光名所パンフレットが届き、連絡を取り合いながら準備は着々と進められた。日程は1999年7月31日、8月1日の2日間と決まり、講義して下さる先生方も決まり、今までとは少し違う健康人間学夏合宿が実現することとなった。

飯 田 晴 天

長野県飯田市は、東に南アルプス、西に中央アルプスを望み、その間を天竜川が流れており、古くからの城下町として栄えてきた土地である。飯田女子短期大学は、その雄大な自然に囲まれた中にあった。7月31日の飯田は晴天

で、中央アルプスが一望でき、すがすがしい気候と共に私たちを出迎えてくれた。

飯田女子短期大学は平成8年に看護学科が開設され、校舎は新しく、設備が整い、吹き抜けの玄関が広々とした空間を作り、明るい雰囲気にも包まれていた。

京都からはOBも含めて7名が参加し、飯田女子短期大学の先生方が暖かく出迎えてくださった。お昼過ぎには皆が集合し、飯田女子短期大学の田宮仁先生のお話から研究会が始まった。

ディセッションその1；仏教ビハーラ

飯田女子短期大学の田宮仁先生からは、日頃先生が考えておられる仏教的看護教育について語られた。話は日本の歴史を通して伝えられてきた仏教の考え方を看護教育に取り入れようとしているという飯田女子短期大学の看護教育の特徴から始まった。

テーマとして挙げられた「ビハーラ」とは、「仏教を背景としたターミナル施設」として使用されており、その話を基にしてターミナルケアについてや医療についてのそれぞれの先生方の意見が交換された。

この意見交換は、人が病み、老い、死を迎えることも、生きていく上では自然なことであり、それと向き合う専門家として何が必要なの

か、決して当事者にはなれないものとしてどう患者に接していくことが大切なのかを考える機会になった。医療に携わる専門家としての知識だけでなく、人としてどのように患者と向き合うのか、人の生と死についてどのように考えるかということも、医療人として考えていく必要性を感じるものであった。

「望岳荘」へ

田宮先生のお話が終わり、飯田女子短期大学を後にして、信州伊那路を通り宿泊所兼ナイトセッションの会場である「望岳荘」へと向かった。望岳荘では、中央アルプスが一望できる温泉にはいり、山の幸を沢山食べ、研究会2として光田和伸先生のお話が始まった。

ナイトセッション；連歌とコミュニケーション

飯田の和菓子を傍らに、国際日本文化研究センターの光田和伸先生から、連歌の歴史と基本法則・形式についての話がされた。

女性が男性の器量を知るために始まったという連歌であるが、次第に勝敗を決めたり、芸術的なものへ変化してきたという歴史から話は始まった。

先生の話を書いた後は、誰でもが連歌ができるようになっているという言葉通り、連歌式目の丁寧で分かりやすい説明があり、一瞬でも自分にもできそうに感じられる話であった。連歌という少ない言葉に込められた想いのコミュニケーションは、現在のようなコミュニケーション手段が沢山ある時代には味わえない奥深さと遊び心を感じることができた。

こうして1日目の勉強会が終わり、雑談会には卒業生も加わって、夜更けまで色々な話が語られた。こうして、1日目は足早に過ぎていき、2日目の朝を迎えた。望岳荘の朝は新鮮な

野菜や花などを売る朝市から始まった。朝市を見て回り、飯田のおいしい空気を吸って頭もすっきりした後、今回最後の研究会である加茂映子先生のお話が始まった。

デイセッションその2；ヴァージニア・ウルフ

加茂映子先生からは、「ヴァージニア・ウルフ」のビデオを見ながら彼女の人生と作品についての話がされた。

まずは、大きなスクリーンに映し出された映像を見ながら、駆け足で彼女の人生を追った。ヴァージニア・ウルフが両親や姉兄の死を体験し、自らも精神的な病いに苦しみながら送ってきた人生は、壮絶なものを感じた。時代的な背景と共に、周囲の人にも影響を受けながらできた作品は、彼女にとって様々な意味があったものと思われた。ある一人の女性の人生だけでなく、文学という形に残る物ができる過程と彼女の生きた時代背景も知ることができた思いであった。

帰路；あらたな旅立ち

長いようで短かった3つの研究会が終わり、健康人間学初めての夏合宿は信州そばを食べて終わりを迎えた。空気の違いなのか、景色の違いなのか、勉強会のおかげなのか、身も心も刺激を受け、京都への帰路につくことができた。

健康人間学というつながりが、京都と長野を結び、ひととひとのつながりを生み、さまざまな視点から健康について考え、楽しむことができた。このような体験も含めて、今後も健康人間学を通して様々な話を聞き、意見を交換し合うことができることを楽しみにしている。夏合宿の帰路は、新しい出会いとつながりを得た健康人間学という会のあらたな旅立ちのように思えた。